志木市複数・少人数指導体制推進事業
～スマート・クラス～

検証報告書

令和８年９月

志木市教育委員会

目次

１．事業の背景と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
　１－１．本事業の背景
　１－２．本事業の目的と評価の視点

２．事業の効果検証の実施方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
　２－１．効果検証の体制
　２－２．スマート教員授業研究会
　２－３．志木市学力・学習状況調査の結果と考察

３．スマート教員を活用した授業の実践・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
　３－１．複数指導体制の実践授業の事例
　３－２．少人数指導体制の実践授業の事例
　３－３．事例と考察

４．スマート教員の活用状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
　４－１．活用形態の状況
　４－２．スタディサポート事業での活用状況
　４－３．活用状況の考察

５．授業を実施した教員の評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７
　５－１．アンケート調査の概要
　５－２．本事業の教員による評価
　５－３．教員の評価の考察

６．スマート教員の評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２４
　６－１．アンケート調査の概要
　６－２．本事業のスマート教員による評価
　６－３．スマート教員の評価の考察

７．児童の評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３０
７－１．アンケート調査の概要
７－２．本事業の児童による評価
７－３．児童の評価の考察

８．まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３６
８－１．得られた成果
８－２．今後に向けて～検証委員会終了後も継続して取り組むこと～

９．令和７年度志木市複数・少人数指導体制推進事業検証委員会　構成員・・・３９

１　事業の背景と目的

１－１．本事業の背景

本市では、平成１４年度から全国に先駆けて、少人数学級編制制度（しきハタザクラプラン）を開始した。この制度は、小学校第１、２学年において２９人を上限、小学校第３学年において３２人を上限とした学級編制を行い、担任によるきめ細やかな指導により児童の学校生活に良い影響を与えるというものであった。国や県の基準より増えた学級には、市で採用した教員（ハタザクラ教員）を充てた。

また、平成２７年度からは、児童の基礎学力の定着を図る目的で、算数科を中心に担任と共に指導にあたる教員を全小学校の第４学年に１人ずつ配置する、しきステップアッププランも開始した。

少人数学級編制制度開始から１０年以上が経過したあたりから、ハタザクラ教員の採用倍率が低下し、必要な教員数の確保が困難になるという問題が生じてきた。また、それに付随し、ハタザクラ教員の指導力が看過できない状況になり、それを支えようとする他の教員にも負担がかかるという別の問題も散見されるようになった。そのため、児童に対する指導の質の低下が懸念されることとなった。

一方で、令和２年度から全面実施された新学習指導要領において求められる「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、子どもたちが受け身ではなく主体的に学習に取り組み、自ら考え、表現し、そして多様な人々との協働をとおして、未来を生き抜くために求められる知識、思考力、表現力などを育む教育活動が必要となった。

少人数学級編制制度の課題解消と、新しい教育に対応するための指導体制の構築を目指し、「複数・少人数指導体制推進事業～スマート・クラス～」を創設した。

また、複数・少人数指導体制推進事業検証委員会等を設置し、学校現場はもとより、専門的・学識的知見、地域・保護者の見地を踏まえた検証を行い、さらなる事業の発展を期した。

※「スマート・クラス」とは

Shiki（志木の）

Multiple（複数の）

Assistant（アシスタント）

Reliable（頼りになる、信頼できる）

Teacher（先生）

１－２．本事業の目的と評価の視点



市内の小学校８校すべてに、２～３人の市費採用教員（スマート教員）を配置し、国語科や算数科を中心に複数指導や少人数指導を一層推進することで、児童一人ひとりに合った指導を継続的に行い、児童の学力向上を図るものとしてスタートした。

しかし、学校の規模に差があることから、スマート教員の配置に関して、平等性に欠ける状況が見られるようになった。また、スマート教員の任用において、勤務形態が多様化してきたことに伴い、フルタイム勤務のスマート教員の配置が困難になってきた。

以上のような状況が見られることから、スマート教員の配置の基準を見直し、令和７年度は学校間での差が生じないように、学級数に応じた配置とした。

スマート教員を配置する学年は第１学年から第４学年までで、このうち第３、４学年については、民間の教育事業者から、派遣された教員の配置を４校に精選し、残りの４校には市費採用のスマート教員を配置している。

「しきハタザクラプラン」との教員配置の違いについては、右上の図のとおりである。事業のポイントは次の４点である。

①児童の様子を見て、スマート教員が必要な児童に対して個別指導を行うなど、担任とスマート教員が連携して授業を進める。

②つまずきやすい教科や単元において、複数の教員によるきめ細やかな指導が可能である。また、コース別学習で児童が自分に合ったコースで授業を受けられる。

③複数の目で見ることで児童への指導や評価を効果的に行うことができる。

④教員が児童と向き合う時間を生み出す。

「期待される効果」としては、次の２点が挙げられる。

①複数の目で指導にあたることで、児童一人ひとりに目を配り、より落ち着いた学習環境を構築することができる。

②つまずきやすい教科や単元に応じて、学級ごとの指導方法及び体制を柔軟に組むことが可能となり、一人ひとりのつまずきを早期発見、対応し、基礎学力のさらなる向上を図ることができる。

以上のような点に基づき、学校の実態に応じたスマート教員の活用を進め、児童のさまざまな力を育んでいる。

２．事業の効果検証の実施方法

２－１．効果検証の体制

本事業の効果を検証するため、事業を開始した平成３１年度（令和元年度）から、「志木市複数・少人数指導体制推進事業検証委員会」（以下「検証委員会」と略す。）を設置した。

検証委員会のメンバーは、学識経験者、小学校長代表、学校運営協議会委員代表で構成している。

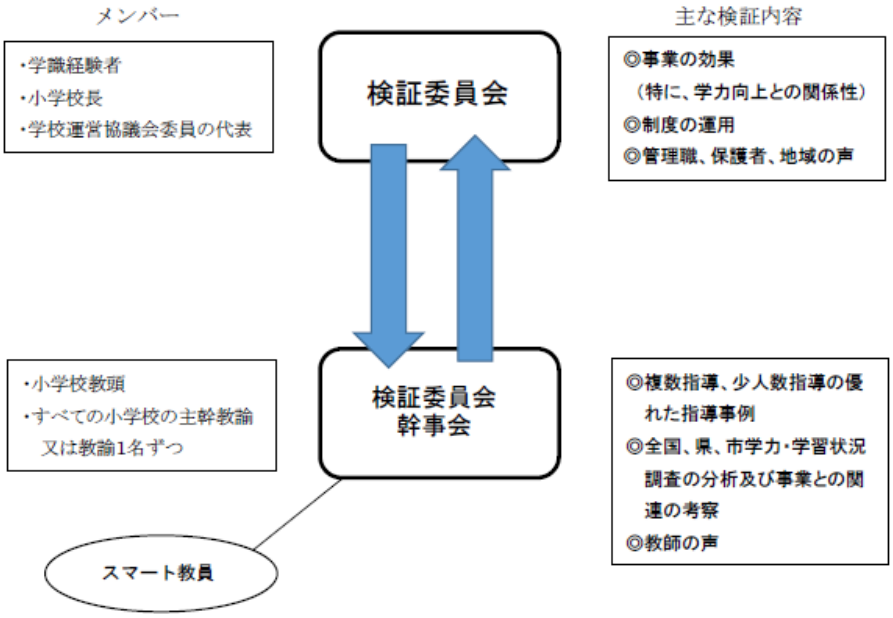
また、学校現場の声を検証に生かせるよう、検証委員会の下に、「志木市複数・少人数指導体制推進事業検証委員会幹事会」（以下「幹事会」と略す。）を設置した。

幹事会のメンバーは、小学校教頭代表、各小学校主幹教諭または教諭１人ずつ、学校教育課長、学校教育推進員（※毎週各小学校を訪問し、スマート教員の研修を受け持つ学校教育課の職員で、校長経験者等が務めている。）で構成し、実際に複数指導や少人数指導を行っている教員の意見に基づき、事業の目的達成のための課題について協議を行っていた。

なお、令和７年度からは、スマート教員の研修の方法を改め、年度初めにスマート教員研修会を実施し、本事業の目的や各校での動き方、スマート教員として取り組んでほしいことなどについて共通理解を図った上で日々の業務に臨めるようにしている。また、スマート教員の授業力向上とスマート教員同士の情報交換の場として、年間２回の授業研究会を実施している。それに伴い、学校教育推進員は配置しないこととしている。

検証委員会、幹事会共に年間３回程度実施している。下図のように、幹事会で取り上げられた内容が検証委員会で報告され、その内容について検証委員会でさまざまな知見から協議を行う。検証委員会及び幹事会で協議された内容は、各学校の幹事及び教育委員会から各学校に伝えられ、事業実践の改善につながっている。

このような検証のサイクルを確立することで、本事業の質を総合的に高めていく。



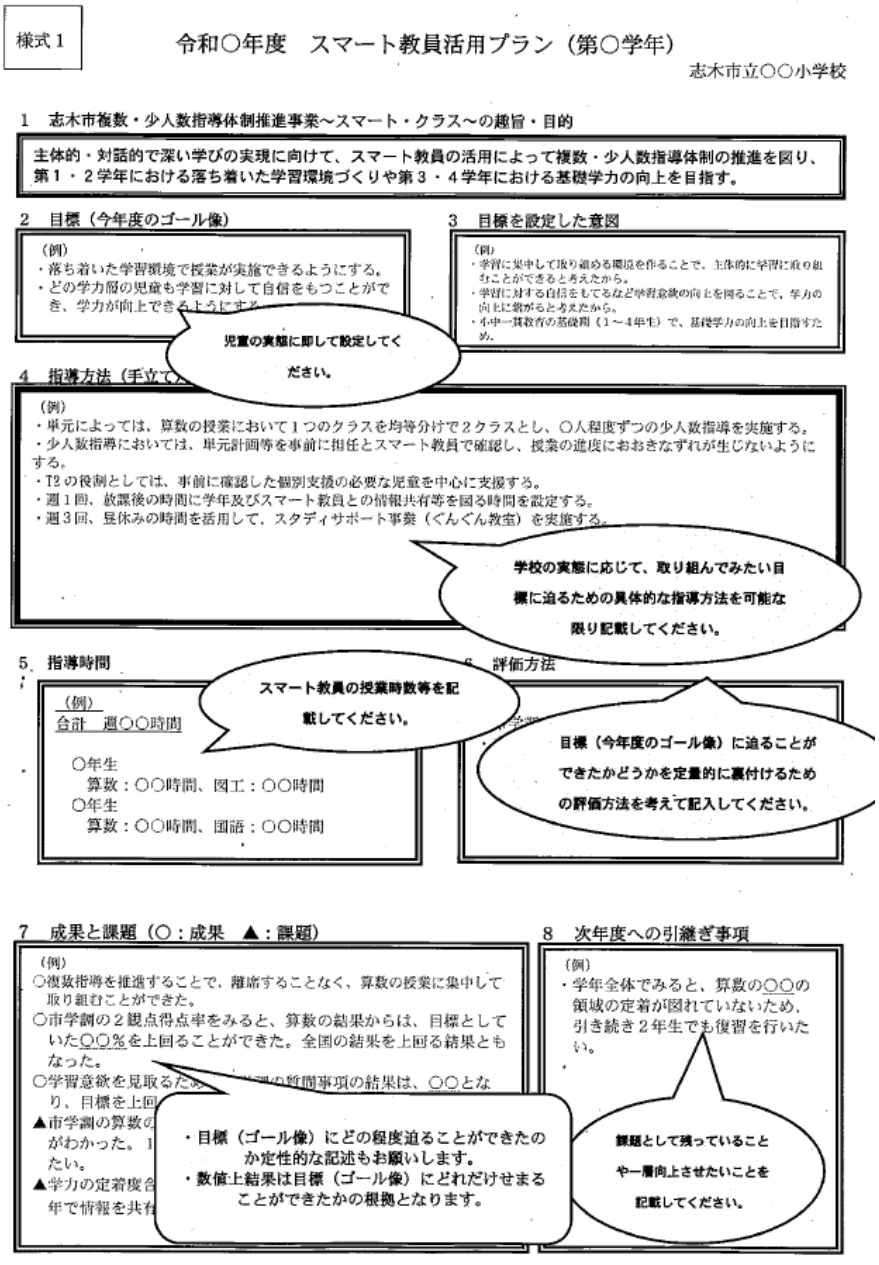
本事業の効果検証を図る一つの方法として、本市では、全国学力・学習状況調査及び埼玉県学力・学習状況調査の対象とならない小学１～３年生を対象に、平成３０年度から志木市独自の学力・学習状況調査を１月に実施している。教科は、国語科と算数科の２教科で、実施年度の４月から１２月までに学習した内容について問うものとなっている。

検証委員会の協議の中で、事業の目的を受け、各学校においても実態に合ったスマート教員の活用とその効果分析を進める必要があるのではないかという意見が出された。それを受けて、令和３年度から各学校に「スマート教員活用プラン」の作成、提出を求めるようにした。

市で立てた仮説「各学校が学力・学習状況調査の分析に基づき、課題解決のためにスマート教員を活用し、『主体的・対話的で深い学び』を積極的に進めれば、児童の学力は向上するであろう。」に基づき、各学校は、上述した志木市学力・学習状況調査の結果等から、スマート教員が配置されている第１学年から第４学年までの実態を分析し、課題解決のための具体的な手立てを挙げる。手立ての効果については、市販のテストや志木市学力・学習状況調査等で分析し、年度末に成果と課題をまとめることで、次年度のプラン作成につなげている。

スマート教員活用プランについては、令和３年度の導入以降、繰り返し検証委員会や幹事会でより効果的な手立てとするため、様式や活用方法の検討を行ってきている。このスマート教員活用プランが形骸化することなく、児童の学力向上に繋がる効果的な手立てとなるよう、今後も引き続き活用状況を分析し、見直していく。

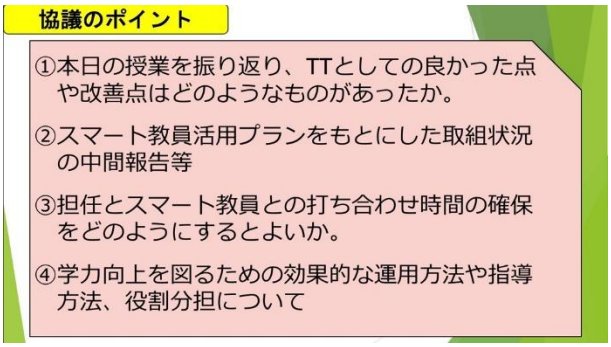
この流れを定着させることが、より実効性のあるスマート・クラス事業への発展につながると考えている。



２－２．スマート教員授業研究会

当初、教員経験のある者がフルタイムでの勤務をすることが多かったが、徐々に勤務形態が多様化し、教員経験にも差が見られるようになってきた。そのため、児童との関わり方や授業力、生徒指導など児童に対する指導の質にも影響が生じ始めた。前述したとおり、本事業が創設された背景にある児童に対する指導の質の低下という問題があったことから、スマート教員の指導力向上を図るとともに、スマート教員同士の横の関係性を構築するため、スマート教員授業研究会を実施した。

令和６年度からスマート教員授業研究会を実施し、複数・少人数指導体制による授業実践を参観した後、授業のことや学級担任とスマート教員の関わり方などについて協議を行った。令和６年度には、第４学年での少人数指導の授業と第１学年での少人数指導の授業を基にスマート教員で協議を行うことができた。令和７年度には、第２学年での複数指導の授業と第４学年での複数指導の授業を基に協議を行った。日頃他のスマート教員の授業を参観する機会がないこともあり、授業を参観するだけでも非常に多くの学びを得られる機会とすることができた。また、協議の際には視点を設けて話し合うことで、それぞれが日々実践している授業を振り返る機会となっただけでなく、出し合った意見から新たな考えを見出すきっかけとすることもできた。



↑↓研究協議会及び指導・講評でのスライドの一部



協議の後には、担当の指導主事から指導・講評も行い、授業の良さを共有するとともに、よりよい授業とするための改善点などについても共有する機会となった。このように、授業参観、参観後の協議、指導・講評を通して、スマート教員の指導力向上に繋げている。

また、指導力向上だけでなく、スマート教員同士の横の関係性を構築することにも繋げることができた。スマート教員は各校の学年に配置されている。そのため、スマート教員同士の授業を参観できないだけでなく、横の関係性の構築もできない場合がある。特に、勤務形態が多様であり、午前中のみの勤務の方もいれば、週２回だけの勤務の方など様々なことも影響して、横の関係性の構築の難しさにも繋がっていることが考えられる。加えて、学校ごとにスマート教員の活用のされ方は異なることから、他校のスマート教員との関係性の構築にも繋がる機会とすることもスマート教員授業研究会のねらいとしている。

スマート教員一人ひとりの指導力を向上させるとともに、すべてのスマート教員が同じ方向を向き、連携しながら本事業に取り組んでいけるよう、今後もスマート教員授業研究会を継続・発展させていく。

２－３．志木市学力・学習状況調査の結果と考察

本市では、全国学力・学習状況調査及び埼玉県学力・学習状況調査の対象とならない小学１～３年生を対象に、平成３０年度から志木市学力・学習状況調査を１月に実施している。教科は、国語科と算数科の２教科で、実施年度の４月から１２月までに学習した内容について問うものとなっている。

志木市学力・学習状況調査は、教研式標準学力検査 CRT による調査であり、任意で実施する調査となっている。そのため、実施している学校は、学力向上に関心をもち、学力向上の取組を実践している学校であることが考えられることから、全国平均得点率は比較的高い水準にあることが想像に難くない。

過去３年間の市全体の調査結果は、以下のとおりである。

Ｒ５	１年国語	１年算数	２年国語	２年算数	３年国語	３年算数
志木市	７１．３	７２．９	７５．６	７１．９	６４．９	６６．９
全　国	７２．６	７５	７５	７３	６６．３	６８．４
全国比	９８	９７	１０１	９８	９８	９８

Ｒ６	１年国語	１年算数	２年国語	２年算数	３年国語	３年算数
志木市	７１．２	７１．６	７２．６	６７．８	６３．９	６７．６
全　国	６９．４	７１．２	７１．８	６７．５	６０．９	６４．９
全国比	１０３	１０１	１０１	１００	１０５	１０４

Ｒ７	１年国語	１年算数	２年国語	２年算数	３年国語	３年算数
志木市	７０．４	７３．１	７１．８	６７．９	６０．９	６６．３
全　国	７１．６	７２．６	７２．１	６８．８	６１．６	６６．１
全国比	９８	１０１	１００	９９	９９	１００

（「全国比」は、全国平均正答率を１００としたときの志木市の値を示すものである。）

令和５年度は、第２学年の国語以外のすべてで全国平均を下回っていた。特に第１学年の算数では全国比の値を見ても、大きく差が開いている様子が見られた。

令和６年度は、すべての学年で全国平均を上回る結果となった。検証委員会や幹事会での分析、スマート教員授業研究会の導入、各校での分析など様々な取組を実践したことの効果が表れているものと考えられる。

令和７年度は、前年度に比べると全国比がやや低い結果となった。ただ、下回っている学年の結果も、全国に比べて大きく下回っているわけでなく、同水準であると考えられる。また、国語よりも算数の方が全体的に良好な結果となっている。

市全体を総じて見ると、概ね直近３年間、全国の結果と同水準に位置していると考えられる。それぞれの学年の児童が毎年異なることを考えれば、年度同士の得点率での単純な比較はできないところである。ただ、経年で全国比を追ってみたときに、令和５年度第１学年の国語９８、算数９７が、令和６年度第２学年で国語１０１、算数１００とな

り、令和７年度の第３学年では国語９９、算数１００となっている。概ね第１学年の結果に比べて結果が向上しているといえる。また、令和５年度第２学年の国語１０１、算数９８は、令和６年度第３学年になると国語１０５、算数１０４と向上している。令和６年度第１学年をみると、国語１０３、算数１０１であり、令和７年度の第２学年は国語１００、算数９９となっている。この学年に関しては、国語も算数も全国比が下がっていることがわかる。志木市学力・学習状況調査の結果を分析してみると、学校ごとに結果に差があるだけでなく、傾向にも特色が見られた。学校ごとに分析するだけでなく、中学校区ごとにも分析することで、多角的・多面的に児童の実態を把握することができ、児童の実態をもとに授業改善を図ることで児童の学力向上を進めていく。

Ｈ３０	１年国語	１年算数	２年国語	２年算数	３年国語	３年算数
志木市	７４．５	７５．３	７８．７	７６．９	６０．７	７０．１
全　国	７３．７	７４．３	７６．９	７５．２	６４．２	７３．５
全国比	１０１	１０１	１０２	１０２	９５	９５

Ｒ７	１年国語	１年算数	２年国語	２年算数	３年国語	３年算数
志木市	７０．４	７３．１	７１．８	６７．９	６０．９	６６．３
全　国	７１．６	７２．６	７２．１	６８．８	６１．６	６６．１
全国比	９８	１０１	１００	９９	９９	１００

（「全国比」は、全国平均正答率を１００としたときの志木市の値を示すものである。）

調査を開始した平成３０年度と令和７年度の結果を比較してみると、平成３０年度に対して令和７年度はどの学年でも全国水準の結果となっていることがわかる。平成３０年度は、第１学年と第２学年において全国を上回る結果となっているが、第３学年の結果は全国から大きく下回る結果となっている。令和７年度では、全国の結果を下回る学年はあるものの大きく下回ってはおらず、加えて、第３学年においても全国比が国語９９、算数１００と全国と同水準にあることがわかる。

勤務形態が多様となり、スマート教員の中にも教育現場での経験をもたない未経験者も含まれ始めたことを考えると、検証委員会や幹事会、スマート教員授業研究会、各校でのスマート教員活用プランなどに基づいた活用の工夫などによって、スマート教員の活用方法が工夫されてきたり、指導力が向上したりしたことによる効果がみられてきたのではないかと推察される。

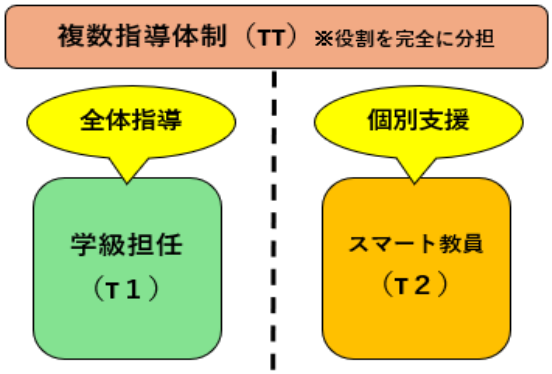
３．スマート教員を活用した授業の実践

３－１．複数指導体制の実践授業の事例

令和７年度のスマート教員授業研究会において、複数指導体制による授業を２本実践した。

１本目は、第２学年の算数「さんかくやしかくの形をしらべよう」の実践であった。

本時の目標は、「不定形の紙を折って直角を作ることができる（知識及び技能）」と「直角の意味を知り、身の回りから直角を見つけている（学びに向かう力、人間性等）」であり、複数の目で児童一人ひとりを見取ることが求められるような授業であった。



↑授業形態のイメージ図

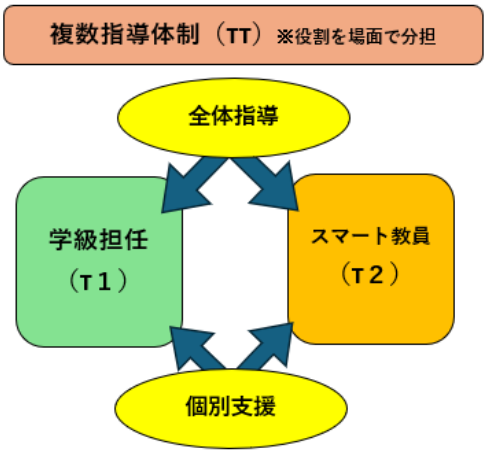
学級担任との複数指導体制、いわゆるティーム・ティーチング（以下、TT）での授業であり、スマート教員は T2 として授業に臨んでいた。

全体指導は T1 である学級担任が行い、T2 であるスマート教員は主に児童の個別支援にあたるという授業形態に取り組んでいた。机間指導をしながら、学習課題や作業が困難な様子の児童に寄り添い、支援を中心に行っていた。学級担任と連携を図り、個別支援が必要そうな児童を事前に情報共有することで、スムーズに支援できるような体制を整えての授業を実践していた。

２本目は、第４学年の算数「直線、平行と四角形」の実践であった。

本時の目標は、「直線の垂直・平行の関係や性質について理解することができる（知識及び技能）」と「作図や作図できる理由を表現する活動、角を調べる活動で、粘り強く意欲的に活動しようとしている（学びに向かう力、人間性等）」であり、１本目同様に複数の目で児童一人ひとりを見取ることが求められるような授業であった。

スマート教員が主に T2 として授業に関わる授業形態での実践であった。基本的には T1 である学級担任が全体指導を行うものの、課題提示の場面や説明の場面、適用問題の場面などでは T2 であるスマート教員が全体指導を行うなど、授業内でも役割分担を明確にし、学級担任とスマート教員が連携しながら授業を実践していた。児童の活動状況を見取る際は、学級担任とスマート教員で見取る児童を分担することで、こまめに多くの児童を見取ることができるように工夫をしていた。



↑授業形態のイメージ図

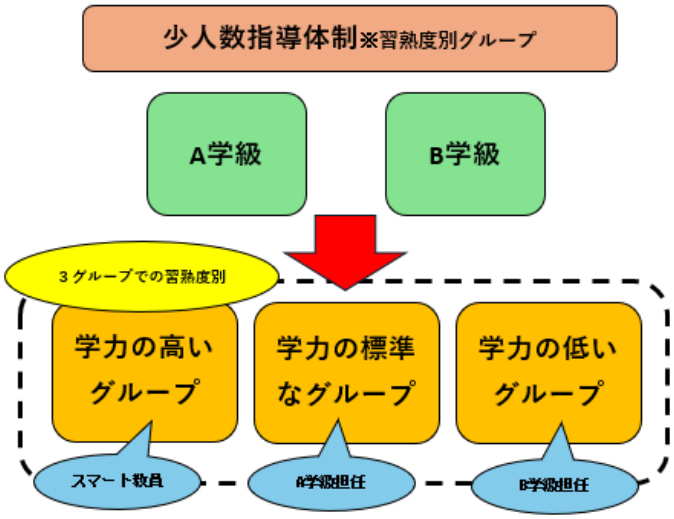
３－２．少人数指導体制の実践授業の事例

令和６年度のスマート教員授業研究会において、少人数指導体制による授業を２本実践した。

１本目は、第４学年の算数「およその数の表し方と使い方を調べよう」の実践であった。

本時の目標は、「四捨五入の意味とその方法を理解し、適切に用いることができる（知識及び技能）」であり、２学級を３つの習熟度別グループに分けたうちの学力層の高いグループでのスマート教員による授業であった。

グループ編制は、レディネステストの結果と本人の希望を基にして行い、「い：教科書を速く進めて難しい問題を解く」「ろ：標準の速さで教科書の問題を中心に進む」「は：復習を入れながら進む」の３グループに編制していた。



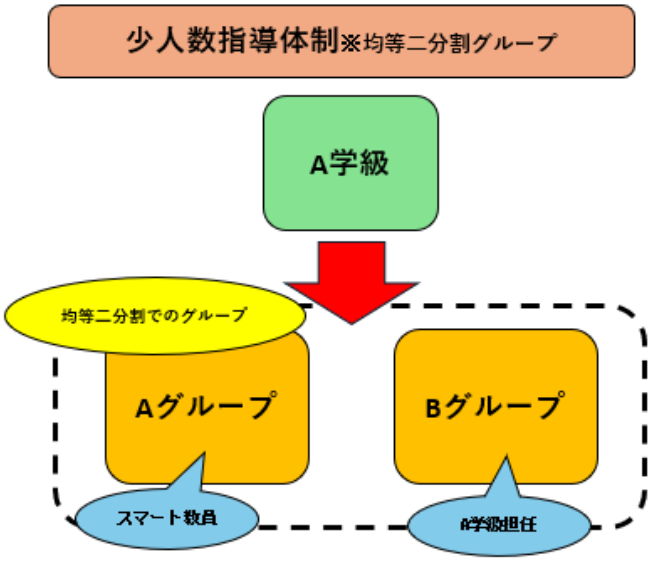
↑授業形態のイメージ図

授業は既習事項の確認をした後、問題について全体で検討し、テンポよく全体で考えを共有していった。全体で解き方を確認した後は、教科書の問題に取り組み、全体でまとめを行った。まとめの後の適用問題の時間を多く取り、教科書の演習問題やプリントの問題に取り組む授業展開となっていた。スマート教員は机間指導を行い、テンポよくつまずいている児童の支援を行っていた。

２本目は、第１学年の算数「くりさがりのある　ひきざん」での実践であった。

本時の目標は、「計算の仕方について考え、ブロックや図、式などで説明することができる（思考力、判断力、表現力等）」であり、１学級を均等二分割で２グループに分けての授業であった。

児童一人ひとりに授業者の目が行き届いた学習を行うだけでなく、児童が発言する機会を多く設定したいという考えからTTの授業形態での授業ではなく、均等二分割による少人数指導での授業形態を選択した。１学級を二分割した授業であり、児童数も１４名と一人ひとりに目を届かせやすい人数であったことから、授業者であるスマート教員が一人ひとりに声かけを行う様子が見られた。少人数ということで児童も発言機会が多く、落ち着いた授業環境であるものの、活発に発言がなされる授業が行われた。児童の理解度の見取りも非常にやりやすい様子が見られ、机間指導中も一人ひとりに丁寧に声をかけながら支援する姿も見られる授業実践であった。



↑授業形態のイメージ図

３－３．事例と考察

複数指導体制の 2 本の事例はどちらもスマート教員が T2 の役割での授業であった。スマート教員の任用形態が多岐にわたっており、毎日同じスマート教員が勤務している学校ばかりではないことを考えれば、学校や学年としては T2 の役割をスマート教員に担ってもらうことがやりやすいのであろう。終業の時刻も多様であり、学級担任との打ち合わせ時間の確保にも課題が残る現状を考えれば、T1 をスマート教員に任せることに難しさが生じてしまう。そういった中でも学校では授業形態を工夫し、児童の学力向上に繋げる試みを実践している。複数指導体制の３－１の事例では、オーソドックスな TT の授業形態での実践であり、T2 のスマート教員は机間指導しながら個別支援を行っている。毎日の勤務ではないスマート教員でも実践しやすい授業形態といえるのではないだろうか。この事例の場合は、個別支援を行いやすくする工夫として、事前に支援が必要であろう児童について学級担任と情報共有を行っていた。そのような学級担任との連携を行うことで、一層効果的な指導に繋げることができると考えられる。

３－２の事例の場合は、単純に T2 の役割に終始するのではなく、場面によっては T1 の役割を担い、スマート教員が全体指導を行う授業形態となっている。意図的・計画的に役割を入れ替えることを取り入れることで、効果的な指導に繋げることができると考える。例えば、学級担任が T2 の役割を担うことで、教室の後方から児童を見ることができ、全体指導をしていた時には気づけなかった児童の様子に気づくことができることも考えられる。どうしても全体指導を行っていると見落としてしまう児童の小さな言動にも気づきやすくなることから、児童理解に繋がるとともに、よりわかりやすい授業実践にも繋がると考える。また、この事例では、学習の理解度等を見取る際、学級担任とスマート教員で見取る児童を分担して、こまめに多くの児童を見取れるような工夫も行われていた。

このように、複数指導体制は実践しやすい授業形態であるとともに、学級担任とスマート教員が連携し、ねらいを持って工夫することでその学習指導の効果を高めることができる授業形態であるといえる。しかしながら、学級担任とスマート教員の連携がなかったり、ねらいを持った取組ではなかったりすれば、学級担任単独の授業に、学習支援員が配置されているような環境となってしまう。スマート教員の良さを十分に生かすためにも、連携を密に図ることやねらいを持った実践することが重要であると考える。

少人数指導体制の授業形態の３－２の事例では、習熟度別でのグループ編制を行う事例と均等に分割でグループ編制を行う事例の 2 本を例示した。少人数指導体制の良さは、ひとえに少ない人数に対して授業を行うことで、児童一人ひとりに目が届きやすくなることである。もちろん均等な人数でグループ編制するだけでなく、各グループの人数比を変えることも工夫できる授業形態である。さらには、グループをどのようなメンバーで編制するのかについても、ねらいに応じて様々な工夫をすることができる。事例の 1 本目は、2 つの学級を 3 つの習熟度別グループに分けての少人数指導体制の実践であった。分け方にも工夫がされており、単元導入前にレディネステストを実施し、その結果を参考にして編制を行っている。ただし、テストの結果のみで機械的に編制するのではなく、児童の希望も確認したうえでグループ編制しており、児童の学習意欲の向上に繋げることもできている。また、各グループのねらいも明確にしており、学力の高いグループでは、授業のテンポを早め、授業内での適用問題に取り組む時間を多く確保していた。学力向上の取組というと、

学力の低い層の学力向上にフォーカスされやすいが、埼玉県学力・学習状況調査の結果から、本市の児童で学力が中位層と上位層の間に位置する児童が多いことがわかっており、学力の中位や上位層の学力向上が求められてきている。習熟度別のグループでの授業形態では、それぞれのグループに適した学習の進み方で学ぶことができるため、それぞれの学力層の児童に対して効果的な学習を行うことができるとも考えられる。

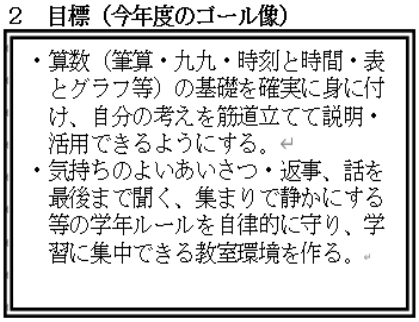
また、2 本目の事例の場合は、1 つの学級を均等二分割で 2 つのグループに分けての実践であった。第 1 学年での実戦であることもあり、習熟度別に分けるほどの学力差がまだ生まれていないこともあってのグループ編制であった。習熟度別グループでの授業ではないものの、グループの児童数が学級の半分の人数になっていることで、児童一人ひとりに目を届かせやすい学習環境となり、一人ひとりの学習理解度を見取りながら授業することができると考える。

このように、少人数指導体制は、指導する児童の人数を少人数にすることで、児童一人ひとりの見取りを容易にし、理解度を確認しながら授業を展開していくことができる授業形態であるといえる。しかしながら、指導する児童の人数は少人数になっているとはいえ、その指導を一人で受け持つことになるため、学級担任やスマート教員の指導力に大きく依存せざるを得ないと考えられる。また、毎日同じスマート教員の勤務がある環境でないと恒常的に少人数指導体制での授業実践ができないことから、スマート教員の任用形態によっては実践が困難な授業形態となることが考えられるところである。

４．スマート教員の活用状況

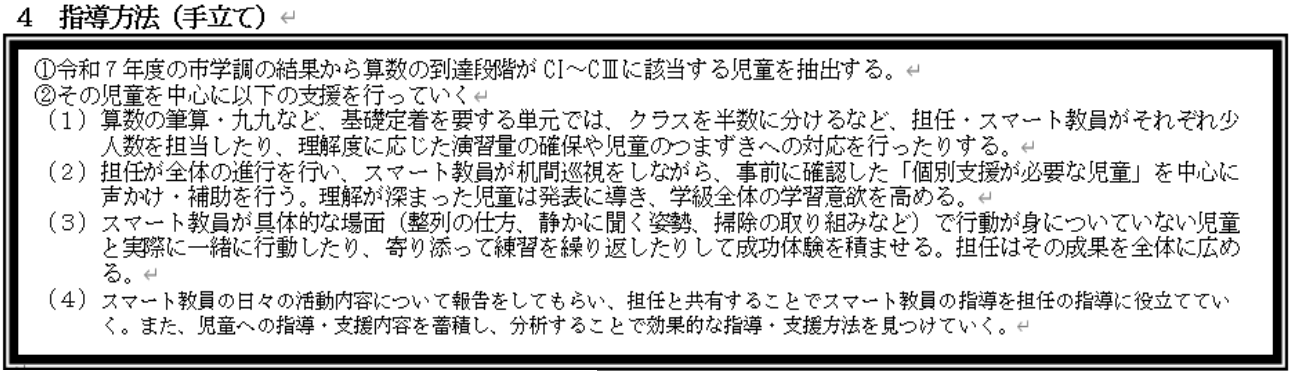
４－１．活用形態の状況

スマート教員の活用については、各校において下記のようなスマート教員活用プランを作成している。スマート教員活用プランには、年度の早い時期に、児童の実態把握を行い、その年度の目標設定をし、目標達成に向けてどのような手立てを講じて取り組んでいくかをまとめている。作成したプランに基づき、一年間の指導を行い、年度終わりには達成状況等を評価したうえで成果と課題についてもまとめており、次年度の学年での指導に生かせるようなものとなっている。

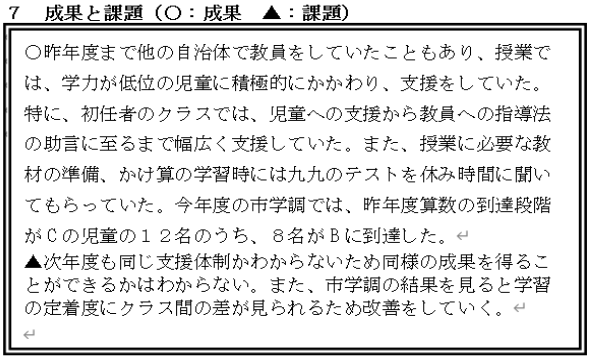

2　目標（今年度のゴール像）

・算数（筆算・九九・時刻と時間・表とグラフ等）の基礎を確実に身に付け、自分の考えを筋道立てて説明・活用できるようにする。
・気持ちのよいあいさつ・返事、話を最後まで聞く、集まりで静かにする等の学年ルールを自律的に守り、学習に集中できる教室環境を作る。

第１・２学年においては、基礎学力の向上はもちろん、落ち着いた学習環境づくりも目的に位置付けていることから、多くの学校でＴ２の役割をスマート教員が担い、児童の学習支援などを中心に取り組んでいる。


4　指導方法（手立て）

①令和７年度の市学調の結果から算数の到達段階がⅭⅠ～ⅭⅢに該当する児童を抽出する。
②その児童を中心に以下の支援を行っていく
（１）算数の筆算・九九など、基礎定着を要する単元では、クラスを半数に分けるなど、担任・スマート教員がそれぞれ少人数を担当したり、理解度に応じた演習量の確保や児童のつまずきへの対応を行ったりする。
（２）担任が全体の進行を行い、スマート教員が机間巡視をしながら、事前に確認した「個別支援が必要な児童」を中心に声かけ・補助を行う。理解が深まった児童は発表に導き、学級全体の学習意欲を高める。
（３）スマート教員が具体的な場面（整列の仕方、静かに聞く姿勢、掃除の取り組みなど）で行動が身についていない児童と実際に一緒に行動したり、寄り添って練習を繰り返したりして成功体験を積ませる。担任はその成果を全体に広める。
（４）スマート教員の日々の活動内容について報告をしてもらい、担任と共有することでスマート教員の指導を担任の指導に役立てていく。また、児童への指導・支援内容を蓄積し、分析することで効果的な指導・支援方法を見つけていく。


7　成果と課題（〇：成果　▲：課題）

〇昨年度まで他の自治体で教員をしていたこともあり、授業では、学力が低位の児童に積極的にかかわり、支援をしていた。特に、初任者のクラスでは、児童への支援から教員への指導法の助言に至るまで幅広く支援していた。また、授業に必要な教材の準備、かけ算の学習時には九九のテストを休み時間に聞いてもらっていた。今年度の市学調では、昨年度算数の到達段階がＣの児童の１２名のうち、８名がＢに到達した。
▲次年度も同じ支援体制かわからないため同様の成果を得ることができるかはわからない。また、市学調の結果を見ると学習の定着度にクラス間の差が見られるため改善をしていく。

授業形態としては、TT の形態が多いものの、学校実態に応じて、１つの学級を２グループに分けての少人数指導体制での授業に取り組んでいる学校もある。

第３・４学年においては、基礎学力の向上を目的に位置付けていることから、少人数指導体制による授業に取り組んでいる学校が多くみられる。一概に少人数指導体制といっても、学校や学年によって様々な実施形態での実践がみられる。１つの学級を均等二分割にして２グループに分けた形態での実践や２つの学級を習熟度別に３グループに分けた形態での実践など様々である。グループの人数にも工夫がみられ、均等二分割で１つの学級を半分にした実践もあれば、学力の低い児童を５名など極端な少人数グループとした習熟度別での少人数指導体制の授業実践もあった。

また、授業形態については、上述したように様々であり、学校や学年に応じて基本的な授業形態が異なるだけでなく、単元や学習内容、授業展開によって授業形態を変えて授業を行っている様子もみられた。例えば、分度器やコンパスの扱い方についても学ぶ際には、説明などを一斉指導で行い、活動の場面で学級担任とスマート教員が連携しながら個別支援を行う TT の授業形態で実践する。授業展開によっては、教室内で理解度に応じて少人数指導体制の授業形態を取り入れるなど工夫した指導の実践も見られた。

４－２．スタディサポート事業での活用状況

スタディサポート事業とは、スマート教員を活用しながら、児童の既習事項定着を主目的とした休み時間や放課後、長期休業中等に行う補習を行うものである。

各学校では、学校や学年の実態に応じて、実施方法等は工夫して実施しているところである。

以下にスタディサポート事業の実施事例を記載する。

【朝の時間での実施事例】

○週１回、朝の時間（ひらめきタイム）を活用して、担任とスマート教員で、特に低学力の児童を支援する。

【休み時間での実施事例】

○週１回、業間休みの時間を活用して、学習教室（スタディサポート事業）を実施している。各学年で実施曜日を割り振り、参加した児童に対してプリントを用いて補習を行う例。

○週の３～５回程度、休み時間を使い、算数サポート教室を実施する例。

○２０分休みや昼休みに、プレイルームを開放し、スマート教員と計算スキルやワークシート等を一緒に取り組める取組を行う例。

○業間休みや昼休みの時間を活用して、算数を中心に１０の分解・構成や計算カードチャレンジを実施する例。

○業間休みや昼休みに学習内容の定着が不十分な児童に対して個別支援として補習を行う例。

【放課後での実施事例】

○月３回ほど、水曜日の放課後の時間を活用して、学習教室を実施する例。

○個人面談期間中に、児童を募り、補習授業を実施する例。

【長期休業中での実施事例】

○夏季休業中に数日間、サマースクールを実施し、学習内容の定着が不十分な児童に対して補習授業を行う例。

○夏季休業中の個人面談期間に、寺子屋を開催し、学習したい児童に対して補習授業を行う例。

各校での実施事例をみると、休み時間での実施が多いことがわかる。上述した事例には記載していないものの、各校においては、授業で理解が不十分な児童がいた際、休み時間に個別指導として補習を実施するなど柔軟に対応している実態も多くみられた。

計画的に設定されたスタディサポート事業のみならず、必要に応じて、休み時間に個別指導を実施するなど、基礎学力の定着に向けて、スマート教員が効果的に活用されている実態がみられている。

４－３．活用状況の考察

スマート教員の活用状況については、スマート教員活用プランを毎年度ブラッシュアップしてきたこともあり、各校において適切に活用されてきている様子が見られる。以前までは、学力向上のためのスマート教員の配置及び活用としていても、どのように活用していけば良いのかなどの共通認識がなかなか根付いていない状況であった。スマート教員活用プランが整備されてきたことで、学校や学年でどのようにスマート教員を活用して学習指導にあたっていくのか学習の計画を立てるうえでの道標のような存在となったり、その活用状況は効果的なものとなっていたのか一年間の授業実践を評価し、振り返って次年度に繋げていく評価書のような存在となってきている。

令和６年度から取り組み始めたスマート教員授業研究会によって、スマート教員の授業力を向上するとともに、スマート教員同士の交流の機会とすることができたため、各校での活用状況についてスマート教員自身が把握することができた。そして、協議の場や指導・講評を通して、それまでスマート教員自身にとっても不明瞭になっていた役割などについて、共通認識を持つ機会とすることができた。その協議の場や指導・講評で初めてスマート教員活用プランやスタディサポート事業について知ったスマート教員も多くいたことから、スマート教員自身が本事業についての理解を深める機会ともなり、それ以前よりも活用状況が好転した要因ともなってきたのではないかと考えている。

一方、本事業の Q&A についてまとめた通知を各校には毎年度発出していたが、その存在についても全教職員やスマート教員にまで伝達が行き届いていない状況も見られた。そのため、幹事会に参加している各校の幹事の教員やスマート教員自身には機会あるたびに説明等を重ね、本事業への理解を深めてきたものの、実際にスマート教員と授業をともに実践する教員がスマート教員の活用について理解が及んでいないという状況がまだまだ残されていると感じているところである。

また、スマート教員の活用の一つであるスタディサポート事業においても、令和７年度時点では全ての学校で意識的に取り組んでいる様子が見られるようになり、基礎学力の向上や定着に向けたスマート教員の活用が進んできたと感じている。上述したように、スマート教員授業研究会や幹事会の際に繰り返し周知してきたこともあり、以前まではなかなか共通理解が図れていなかったスタディサポート事業についても、浸透してきたものと推察している。

令和７年度にかけて幹事やスマート教員を中心に、スマート教員の活用については非常に理解を深めることができたと考える。しかし、実際にスマート教員と授業を実践する教員への共通理解は不十分であるとも感じている。令和７年度のスマート教員授業研究会では、幹事会と同時開催を試み、それまでは別で会議を行なっていた幹事とスマート教員が一堂に会し、話し合える機会を設定した。同時開催としたことで、両者にとっても非常に良い機会となったとの声も聞こえたところである。今後は教員に対しても本事業について共通理解を促進できるよう、周知方法を工夫することやスマート教員授業研究会に教員が関われるように実施方法を工夫することなどして、スマート教員の活用についての理解を深めていきたい。

５．授業を実施した教員の評価

５－１．アンケート調査の概要

①調査実施期間：令和８年２月２５日～３月４日

②調 査 対 象：市内小学校の第１学年～第４学年の学級担任

③調 査 方 法：各学校における１人１台端末（タブレット）を活用した調査

④調 査 項 目：下図参照

⑤回　収　率：該当教員　教員数８１名　回収数６８件　回収率８４．０％

００　学校名

選択式

０１　担当学年

選択式

０２　本事業は、子供たちの学力向上や学習意欲の向上に繋がっていると思いますか。

（とてもそう思う・ややそう思う・あまりそう思わない・そう思わない）

０３　本事業により、肯定的な効果が感じられたものには、どのようなものがありましたか。

（複数回答可）

□学力向上　□落ち着いた学習環境づくり　□生徒指導
□教育相談　□児童理解　□学習評価
□教職員の業務負担の軽減　□職場環境づくり
□その他＿＿＿＿＿＿

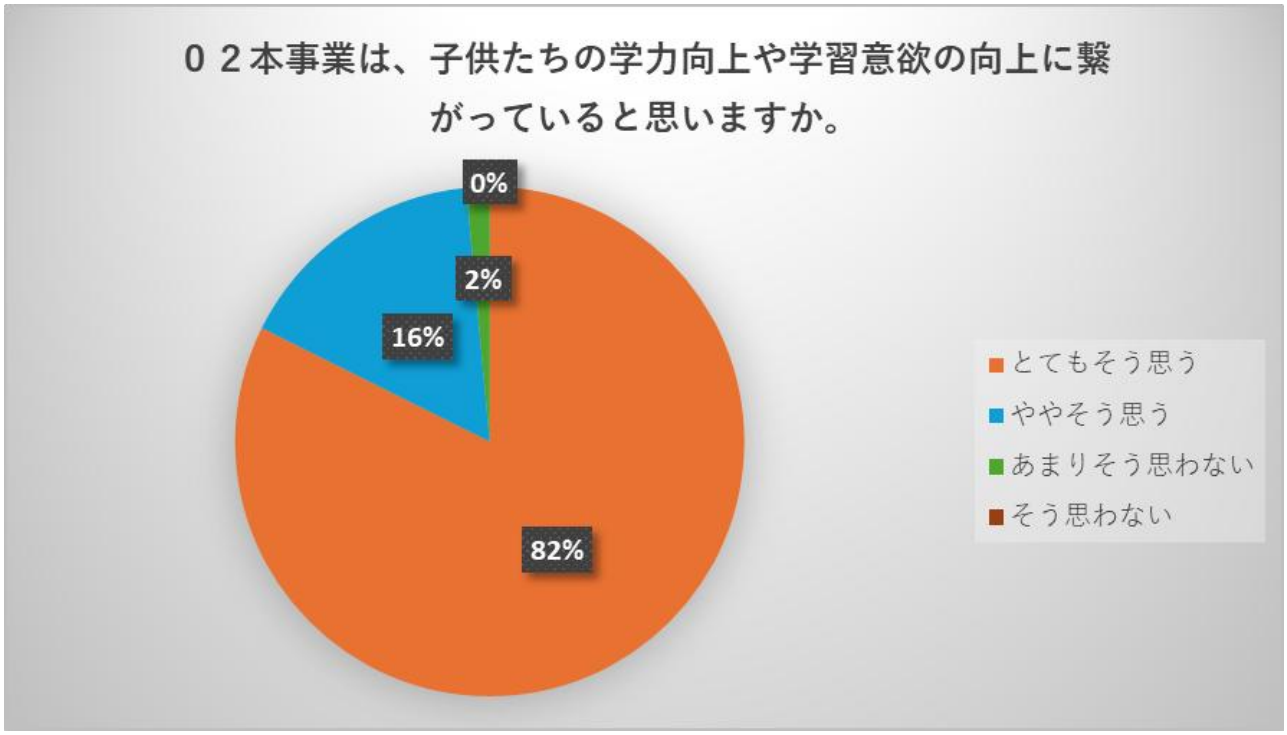
０４　０２、０３で回答した理由を具体的にお答えください。

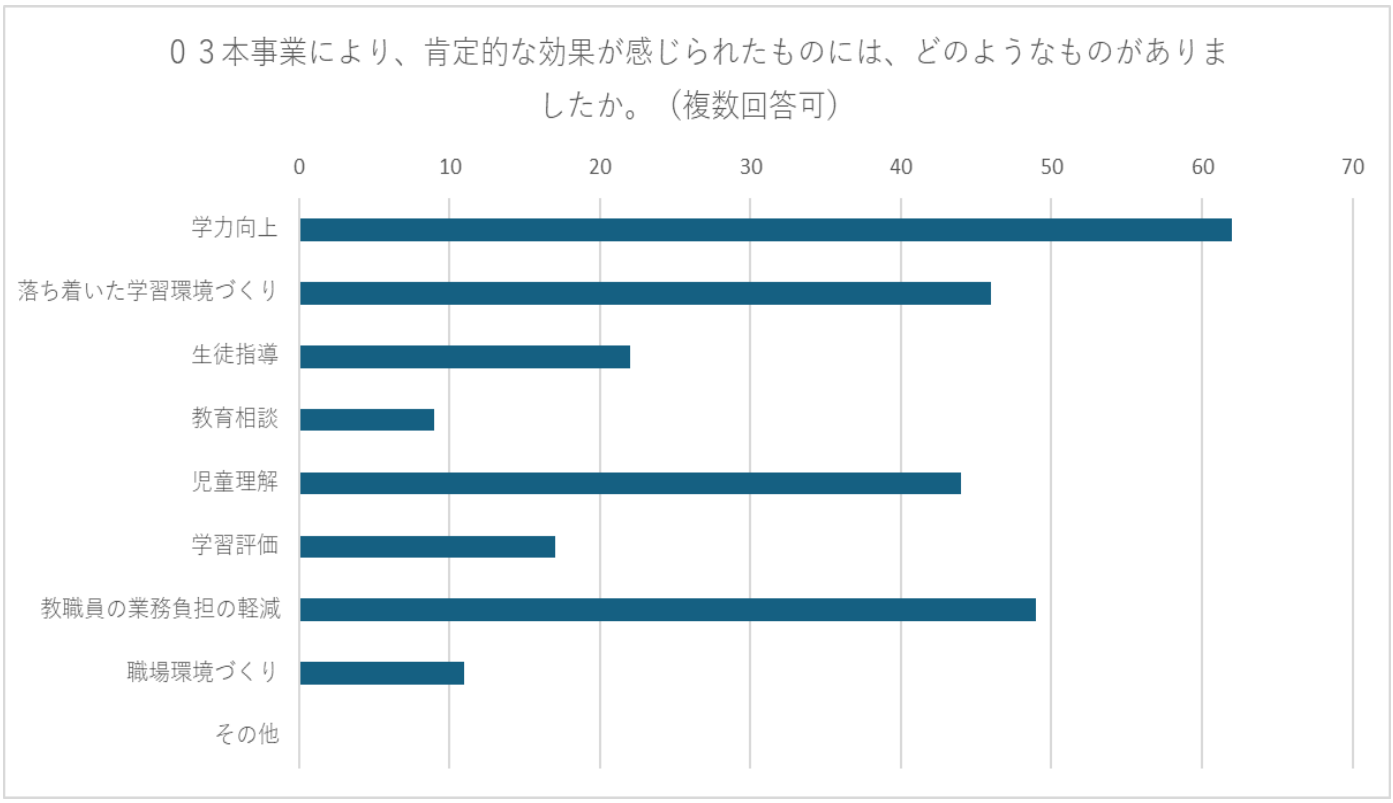
記述式

０５　本事業における解決すべき課題にはどのようなものがあると思いますか。併せて、その課題の解決方法についても案がありましたら、ご記載ください。

記述式

５－２．本事業の教員による評価





０４　０２、０３で回答した理由を具体的にお答えください。（回答数：６８件）

※主な回答をまとめて記載しております。文言は整えております。

【とてもそう思う】

・経験が豊富なスマート教員は、授業のアイデアも豊富にもっており、学級担任の指導力向上にもつながっている。
・学級担任の業務負担軽減に役立っている。
・複数体制で授業が実施できたことで、児童理解にもつながり、とても落ち着いて授業を進めることができ、児童の学力向上につながった。
・複数体制で授業ができるため、児童への声かけの頻度も高めることができ、きめ細かな学習支援ができる。
・複数の目で見ることによって、児童を多角的に捉えることができ、指導の面や評価の面でも助かっている。児童の安心感につながっている。
・複数の目でみることにより、学級担任１名では気づけなかった部分にも気づくことができ、学習のフォローをしてくれて助かっている。
・日々の宿題チェックやテストの採点なども担ってくれ、業務の負担軽減になっている。
・少人数指導で丁寧に指導してもらった。適宜授業のフィードバックがあったのも非常に助かった。
・児童に対する手厚い補助のおかげで、児童の学力の底上げになった。
・算数の学習において、かなりの学力向上が見られた。
・算数の少人数指導を実施したことで、学習に躓きやすい児童にきめ細かく対応することができた。
・複数指導体制を行ったことで、児童の学習をより一層見取ることができるようになった。
・学習の習熟状況を相談でき、学級の実態に合った授業を展開することができた。
・学力向上では、授業を中心に、個別で指導することができるため、児童が「わかる・できる」という経験をたくさんすることができた。その結果、テストの平均点が９０%以上を維持したり、学習に意欲的に取り組めたりすることができた。
・休み時間の補習にも注力することができ、学習支援の必要な児童に丁寧に対応することができた。
・児童一人ひとりに対して、丁寧に対応することができる。
・個別の支援が必要な児童に対して、学習支援や生徒指導を協力、連携して取り組むことができ、児童にとっても担任にとっても心強い。
・生徒指導場面や教育相談の場面でも、担任一人で対応するのではなく、複数で対応することができ、より厚みをもって指導することができた。
・授業内容をともに考え、学習プリントを作成することで、宿題や練習問題に取り組むことができ、学力向上と学習習慣の確立につながった。
・学習の定着に時間のかかる児童にしっかりと教えることができる。
・少人数指導を行い、算数を苦手とする児童の自己肯定感も上がり、全体的に伸びが見られる。
・学年全体で少人数制を行なっているため、担任１人の見取りではなく、複数人で評価できるため、客観性も高く、より正確な評価や支援につながっている。

・少人数は一人一人の授業での活躍の場が増え、目が届きやすかった。児童との距離が縮まり、深い児童理解へとつながった。
・少人数は児童の学習状況が把握しやすい。複数対応は児童理解につながる。
・大人数では落ち着いて授業を受けられない児童は少人数に分けた事で、落ち着いて授業を受けることができた。
・きめ細やかで丁寧な指導をしていただいているため、一人ひとりが取り残されずに進めているように思う。自分たちのペースで進めるので、自信がついているように思う。
・学習に関しても単元ごとに少人数、理解度別、一斉と変更しても臨機応変に対応してくれた。その結果、算数の学力向上に繋がったと感じる。
・個別支援が必要な児童に対して、授業内、休み時間に個別指導をしてもらったおかげで、学級が落ち着くとともに、基本的な学力の定着につながった。
・複数体制ということで、例えば、「あの先生には言いにくいけど、この先生になら相談できるかも」といった形で、児童にとって相談相手の選択肢が増えるというよさもあると思う。

【ややそう思う】

・学習に不安な児童を取りだして個別指導を行うことが出来たので、遅れることなく学習に取り組めた。
・学力学習意欲につながっていると思う。
・クラスの児童を半分に分けて授業することで落ち着いた学習環境作りができたから。
・スマートの先生が一緒に九九検定を見てくださったので全員合格することができた。
・宿題のチェック、授業中の丸つけなどもしてくださるので負担軽減になった。
・担任には言えないことをスマートの先生に言うことで児童理解にもつながった。
・学習に遅れが出ている児童の学習を見てもらうことができた。
・採点をしてもらうことで業務負担が軽減した。

【あまりそう思わない】

・今年度、受け持っている学年にはスマート教員が空いている時間にたまに来る程度であり、回数が少なかったことから、学力向上に役立ったとは言えない。

０５　本事業における解決すべき課題にはどのようなものがあると思いますか。併せて、その課題の解決方法についても案がありましたら、ご記載ください。(回答数：６８件)

※主な回答をまとめて記載しております。文言は整えております。

・本校では、課題と感じることはない。
・できれば、スマート教員の人数を増やしてほしい。
・今後も、人材確保と指導法などの研修の充実が欠かせないと思う。
・学校はチームで子どもを育てる場だと思うので、役割や期待される動きについて共有する機会や、教員と同様に時折指導や評価の機会があると、より良い連携につながるのではないかと感じた。
・担任とスマート教員という立場の違いを理解できておらず、仕事に従事し切れていない方もいると感じたので、しっかりと共通理解を図るようにすべきだと感じた。
・スマート教員に、年度始めに業務の内容を市の方できちんと確認していただけるとスムーズに仕事が進むと思った。どの仕事が頼めて、どの仕事が頼めないのか、スマート教員も含めて全教員に共通理解が図れるとよい。
・教員経験があるとスムーズだが、ない場合は、仕事に慣れるまでや必要な支援の理解（実質的な仕事内容の理解）に時間がかかる。
・スマート教員の力量を向上させるための、定期的な研修の実施（期間研修や外部研修）
・効果の検証方法について、どのように行うのか。
・スマート教員との連携のために打ち合わせの時間を設ける。
・経験がある方とそうでない方がいらっしゃる以上、市教委の方で研修や見回りをするなどしていただきたい。
・児童数に合わせた配置人数の検討をお願いしたい。
・大変効果が高い取り組みだと思うので、算数に限らず、他の教科や教育活動にも複数・少人数指導体制がさらに拡充するとよいと思う。
・高学年にも本事業を取り入れてほしい。

５－３．教員の評価の考察

「０２　本事業は、子供たちの学力向上や学習意欲の向上に繋がっていると思いますか」の質問に対して、肯定的な意見が９８％という結果となった。スマート教員と実際に授業をともに実践する教員の認識の中からも、本事業の取組が目的に対して非常に高い成果を挙げているということがわかる。

さらに、「０３　本事業により、肯定的な効果が感じられたものには、どのようなものがありましたか。（複数回答可）」への回答結果をみると、本事業の目的である「学力向上」と「落ち着いた学習環境づくり」が肯定的な効果が感じられたものとして非常に高い結果となっていることがわかる。現在の本事業の取組状況が教員からも目的に即した効果的なものとして認識されていることは、本事業の成果として考えることができる。「０４　０２、０３で回答した理由を具体的にお答えください。」の回答でも、「学力向上」と「落ち着いた学習環境づくり」については非常に多くの回答がみられたことからも、本事業が非常に良い成果をあげることができているということがわかる。

また、本事業の目的とは異なるものの、０３の質問を複数回答可として選択肢を複数設定したところ、他の面においても本事業による肯定的な効果が感じられたものがあった。その副次的な効果として多くみられたものには「児童理解」と「教職員の業務負担の軽減」があった。両回答とも、回答した教員の半数以上が肯定的な効果を感じたとの回答であった。「児童理解」の回答理由についてみてみると、複数の目で多角的に児童を捉えることができたことで、学級担任だけでは把握できていなかった児童の様子について、スマート教員から話を聞くことができ、多面的な児童理解に繋がった旨について多くの回答があがっている。「教職員の業務負担の軽減」に効果があるとした理由については、日々の宿題チェックや丸つけ、教材や教具など授業準備のサポート、教材研究などによって業務負担の軽減に繋がったとのことである。丸つけにおいても、授業中にその場で正誤を確認し、児童が解き直す活動する際、学級担任一人では対応が困難な場面で、スマート教員がいることで二人体制での丸つけ作業ができることなどが回答としてあがっている。

回答数は少ないものの、スマート教員の豊富なアイデアにより学級担任自身の指導力向上にも繋がっているとの回答もみられた。生徒指導や教育相談関係のことについても、スマート教員を交えて話し合うことで、多くの視点で意見を持つことに繋がり、指導に生かすことができたとの回答もみられた。

各校の教員の評価を通して、本事業の取組は、子供たちの学力向上や学習意欲の向上に非常に効果的であると認識されており、児童理解や教職員の業務負担の軽減など多くの副次的な効果もあり、非常に良好な成果をあげている。

一方、本事業における解決すべき課題についても多くの回答があった。最も多い回答は、スマート教員の増員についてであった。本事業では、算数を中心にスマート教員が授業に携わっていることもあり、他教科でも複数体制での実施がしたいという意見や学級数の違いにより、スマート教員の配置が異なる点についての回答もあった。令和７年度からは、第１・２学年へのスマート教員の配置基準を見直し、学級数の多い学校とそうでない学校との間で大きな差が生じないように工夫してきた。しかし、第３・４学年への配置に関しては、現状各校に１名ずつの配置としていることから、学級数の多い学校では毎時間の算数にスマート教員が配置できていなかったり、あるいは第３学年だけに配置し、第４学年

への配置ができていなかったりしている学校もある。今後は、第３・４学年についても配置方法を見直すなど学校間での差が生じにくい工夫をしていく必要があると考える。また、スマート教員の力量差についての意見やスマート教員の活用方法の不明瞭さなどについての意見もみられた。これらに関しては、令和７年度から実施した年度当初のスマート教員研修会や、スマート教員授業研究会を一層充実させることで、課題の改善を図っていきたいと考えている。

解決すべき課題には、「特にない」という意見も多く見受けられた。教員においては、本事業の取組が現状でも良好であるという認識を持っていることと推察されるが、他方で多くの課題をあげている教員もいる。現状に満足せず、本事業を一層発展充実させて、児童の学力向上に繋げていきたい。

６．スマート教員の評価

６－１．アンケート調査の概要

①調査実施期間：令和８年２月２５日～３月４日

②調 査 対 象：スマート教員

③調 査 方 法：各学校における１人１台端末（タブレット）を活用した調査

④調 査 項 目：下図参照

⑤回　収　率：スマート教員　教員数２６名　回収数２６件　回収率１００．０％

００　学校名

選択式

０１　担当学年

選択式

０２　本事業は、子供たちの学力向上や学習意欲の向上に繋がっていると思いますか。

（とてもそう思う・ややそう思う・あまりそう思わない・そう思わない）

０３　本事業により、肯定的な効果が感じられたものには、どのようなものがありましたか。

（複数回答可）

□学力向上　□落ち着いた学習環境づくり　□生徒指導
□教育相談　□児童理解　□学習評価
□教職員の業務負担の軽減　□職場環境づくり
□その他＿＿＿＿＿＿

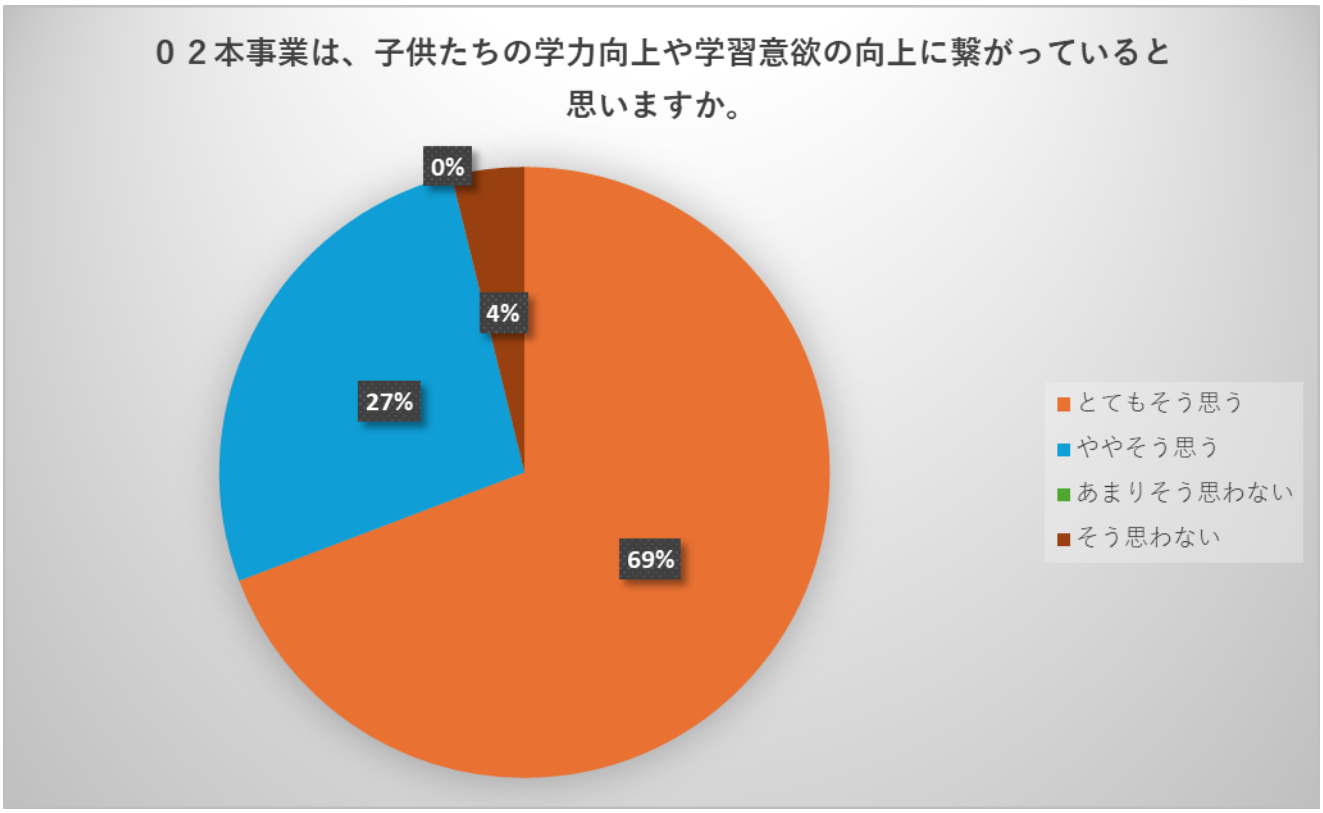
０４　０２、０３で回答した理由を具体的にお答えください。

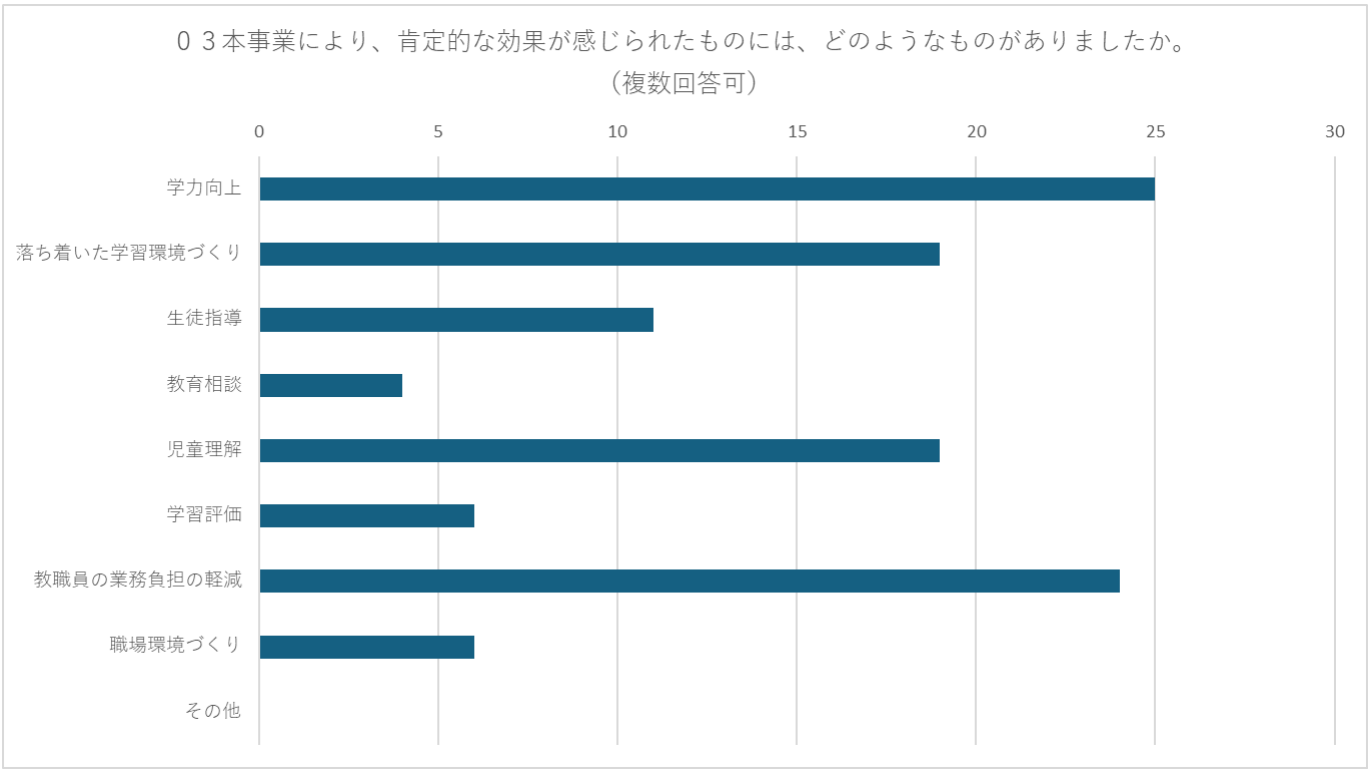
記述式

０５　本事業を実践する中で、今後解決すべき課題はどのようなところでしょうか。また、その課題の解決方法の案がありましたら、併せてご記載ください。

記述式

６－２．本事業のスマート教員による評価





０４　０２、０３で回答した理由を具体的にお答えください。（回答数：２６件）

※主な回答をまとめて記載しております。文言は整えております。

【とてもそう思う】

・低学年の基本的な学習習慣、規律の確立時期に多くの目で子どもたちを見ていくことがとても大切かと考え、この事業の効果と考える。
・スマート教員が担任とともに、指導に当たったり、個別指導をしたりすることで落ち着いて学習でき、集中して学習に取り組めるようになってきた。
・担任と一緒に手分けしてドリルなどの丸つけをすることで、学習の理解度など、共通理解することができ、指導に役立てることができた。
・習熟度別クラスによる授業が恒常的に行えることで、どの層の児童にとっても効果的な授業を展開することがしやすくなったと思う。
・４年生では算数で少人数で授業を行ったところ、普段は発言が少ない児童もやる気をもって質問をし、取り組む姿勢が見られた。小テストやテストで良い点数を取れた時の顔は、とても満足したものであった。
・担任と授業を振り返り、授業の進め方を工夫したり、それに必要な教材を作って授業に役立てたりした。数字ではなかなか表せないが、子供達の授業中の反応が活発になり、個別に指導が必要な子が減ってきた。
・習熟度別に学習に取り組めることは、上位・低位どちらの児童にとっても有効だったと思う。丸つけ、採点業務などが分担できたことも良かった。
・担任には聞きにくい質問出来ない事でも、身近にいるスマート教員とすぐに対話出来る環境になっていると思う。
・児童への援助、教職員のサポートにより子供たちの安心安全から余裕が生まれ、学力向上および学習環境の向上のお役に立てると思う。
・短期記憶が苦手、文章の中から文字を追うことが苦手、数の概念化がまだ難しい等、個々の細かい苦手を把握しやすい。それを担任と共有し、教材等を工夫することで児童の理解を促すことができる。
・個別に指導することにより、学力の底上げがある程度達成できたと思う。
・複数人で子どもたちを見ることでより丁寧に学習指導にあたることができると思う。また、教材づくりなどを担当することで、担任の負担を少しでも減らすことができたと思う。
・担任の業務の負担軽減のほか、（一緒に働くメンバーにもよるが）風通しが良い雰囲気ならチーム力が向上し、一層の工夫や改善ができると思った。
・授業の支援に入り学力の向上の手助けをしている。また、授業の中で一緒に採点やプリントの採点や点検をすることで教員の業務の負担軽減につながっていると思う。

【ややそう思う】

・少人数指導を行うことにより、より細やかなサポートができた。年度初めのテストは平均点に達していなかったが３学期には平均点以上を得点できるようになった児童もいた。
・T2 で指導に入り、授業に集中できていない児童に声をかけ授業に参加させた。国語などの作文課題で困っている児童のサポートを行い、課題に向かわせることができた。
・少人数クラス、また休み時間などに児童から聞いた情報、児童の様子を担任の先生と共有することができた。
・前時の復習を毎時間いれたら、単元によっては、低位の子のテストが上がった。高位の子については、出来る範囲の段階別プリントを用意し、取り組ませたら、相乗効果があり、前向きに取り組んでいたので、少しは学力向上に役立てたかなと思う。
・欠席していた児童の取り出しの個別の指導で、授業の遅れを取り戻すことができる。
・複数で児童を見ることで、学習の定着や授業態度の改善ができる。
・授業に必要なプリントの印刷など、教員の負担軽減ができる。

【そう思わない】

・少人数指導により児童にきめ細かな指導をすることができた。

０５　本事業における解決すべき課題にはどのようなものがあると思いますか。併せて、その課題の解決方法についても案がありましたら、ご記載ください。(回答数：２６件)

※主な回答をまとめて記載いたします。文言は整えております。

・仕事内容が曖昧な点。どこまではOKでどこからは担任ではないといけないのか。年度はじめの文書では回ってきてはいたのですが、担任の先生や管理職の方々で共通認識がもてると良いと思う。
・スマート教員が良くも悪くも学校教員と同化しており、差がなくなっていると感じます。
・学校によってスマートに対する認識の違いや扱いの違いを感じて異動する度に戸惑いを感じる。先生達にスマートの役割や働きなどをもっと理解してもらっているともっと役に立てるのではないかと思う。
・スマート教員と教員との打ち合わせ時間の捻出、連携方法が課題。
・スマート教員個人の思いだけでなく、担任の意向にも沿って協力的に指導に入る姿勢が大事だと思う。
・今年度は、個人的に担任の先生方と密に話す機会を毎回得ることができたが、出勤日以外の様子が分からず現状把握が難しいことがある。
・担任とスマート教員の連携不足が見られる場面がある。役割分担を明確にする。
・スマート教員は、担任の先生と違って、授業をやりたくても、実際に経験を積んでいない人もいらっしゃると思うので、今年度のように授業をみる機会や教科における新しい学習方法などを学ぶ機会があれば、進んで授業に参加できると思う。
・先生方同様にタブレットを支給して頂けると、先生方が不在の時でも、今以上に支援できるのではとも感じています。
・スマート教員用の指導書が欲しい。算数だけでもあると助かる。取り出して学習する際、指導内容をしっかり押さえて教えることができると感じた。
・普通学級に注意多動傾向の児童がおり、授業がとどこおることもあります。そのような経験から対応の手立てなどのスキルアップの場があると良い。
・教室に入る時にどの程度介入したら良いか、悩むことがある。常に担任と話し合いながら共通理解を図るようにしたい。

６－３．スマート教員の評価の考察

「０２　本事業は、子供たちの学力向上や学習意欲の向上に繋がっていると思いますか。」の質問に対して、肯定的な回答が 96%という結果となった。スマート教員自身の認識としても、本事業の取組は、目的に即したものとなっており、非常に効果的なものとなっていると感じていることがわかる。

さらに、「０３　本事業により、肯定的な効果が感じられたものには、どのようなものがありましたか。(複数回答可)」の回答結果をみると、本事業の目的である「学力向上」と「落ち着いた学習環境づくり」の回答が肯定的な効果が感じられたものとして非常に高い結果となっていることがわかる。ここから、現在の本事業の取組が、スマート教員自身からみても、目的に即した取組となっており、非常に効果的なものとして認識されていると考えられる。「０４　０２、０３で回答した理由を具体的にお答えください。」の回答結果からも、「学力向上」と「落ち着いた学習環境づくり」に関しての回答が多く見受けられる。特に学力の低い児童の学力向上を図ることができた旨の回答が複数あり、複数の目で、児童にきめ細やかな指導をすることができた結果であると、スマート教員自身の認識の中でも感じていることがわかる。同様に、第１・２学年の目的の一つでもある「落ち着いた学習環境づくり」に関しても、T2 で指導に入り、個別に声かけをするなどして、児童が落ち着いて課題に向き合えるように取り組めたことなども回答にあがっているところである。

また、本事業の目的とは異なるものの、０３の質問において複数回答可として、選択肢を設定したところ、「児童理解」や「教職員の業務負担の軽減」にも効果が感じられたと考えるスマート教員が半数以上いることがわかった。回答理由の中にも、複数の目で見ることで児童に寄り添った指導をすることができた旨やスマート教員だから知り得た児童の情報を学級担任と共有することで、学級担任の児童理解に繋がった旨の回答などがみられた。さらには、丸つけやプリント作成、教材作りなどを担うことで、学級担任の負担軽減を図れた旨の回答も複数見られた。

スマート教員の回答結果からは、本事業の取組が非常に良好であり、目的達成に向けて効果的であると認識していることがわかる。このような回答結果は十分に本事業の成果といえるのではないかと考える。

ただ、０５の質問の解決すべき課題についての質問に対して、スマート教員の業務の不明瞭さや学級担任との連絡調整の難しさなどについての回答がみられた。業務の不明瞭さについては、まずはスマート教員自身、そして管理職や各校の幹事、スマート教員と実際に授業をする教員の全員が共通認識をまだ持てていないということが改めて浮き彫りになったものと考える。年度当初のスマート教員研修会でスマート教員自身に共通認識を持ってもらうと同時に、学校へもスマート教員の業務を校内で共有してもらえるような仕組みづくりをし、全員が共通認識のもとで本事業の取組を実践していけるように環境整備に努めたいと考える。一方で、解決すべき課題として「特にない」と回答しているスマート教員もいることから、今までの取組の全てに課題があるわけではないことがわかった。解決できることから手を加え、本事業がより一層効果的なものとなるようにしていきたい。

７．児童の評価

７－１．アンケート調査の概要

①調査実施期間：令和８年２月２５日～３月４日

②調 査 対 象：スマート教員が配置されている学年の児童

③調 査 方 法：各学校における１人１台端末（タブレット）を活用した調査

④調 査 項 目：下図参照

⑤回　収　率：第１学年　児童数６１６名　回収数５５０件　回収率８９．３％
第２学年　児童数６１３名　回収数５３０件　回収率８６．５％
第３学年　児童数７０３名　回収数５３７件　回収率７６．４％
第４学年　児童数４５２名　回収数３７０件　回収率８１．９％
合計　児童数２，３８４名　回収数１，９８７　回収率８３．３％

００　学校名

選択式

０１　学年

選択式

０２　二人の先生と一緒（いっしょ）に授業（じゅぎょう）することで、勉強（べんきょう）はわかりやすくなりましたか。

（とてもそう思う・ややそう思う・あまりそう思わない・そう思わない）

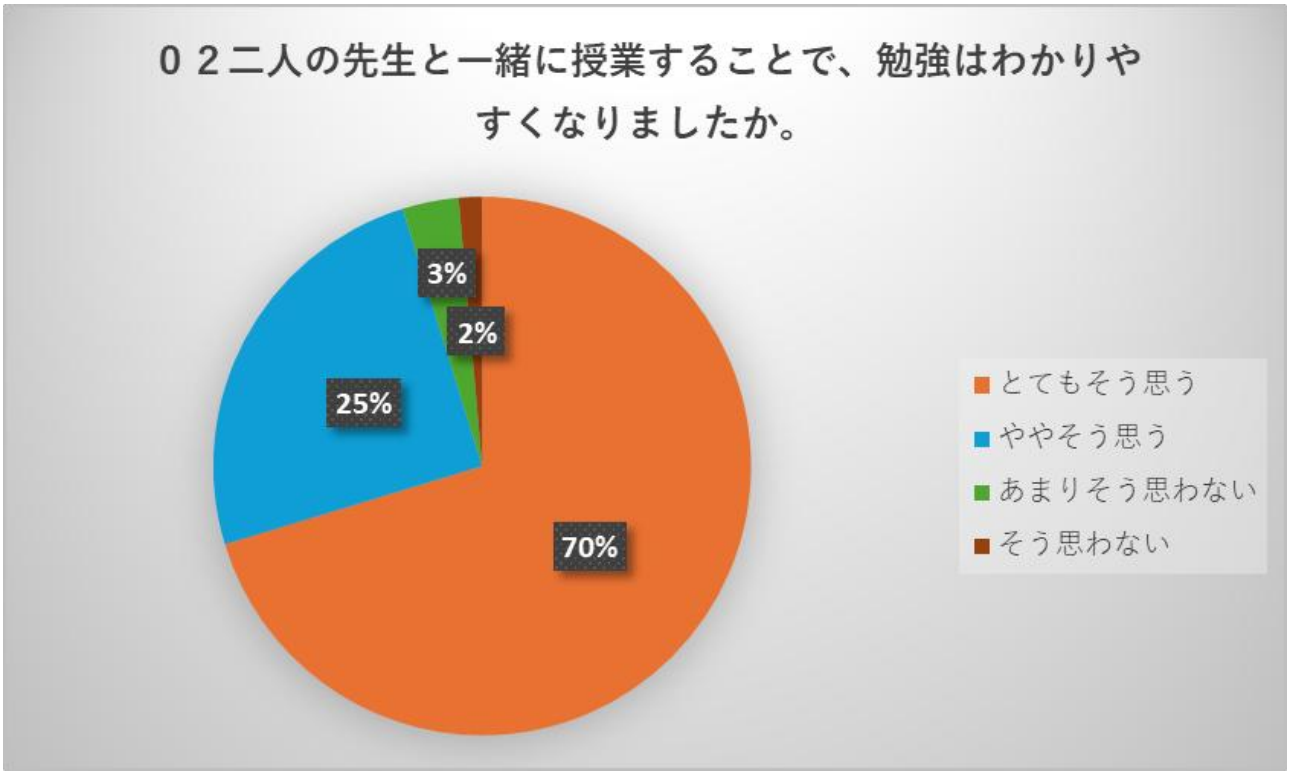
０３　０２のように回答（かいとう）した理由（りゆう）を教（おし）えてください。

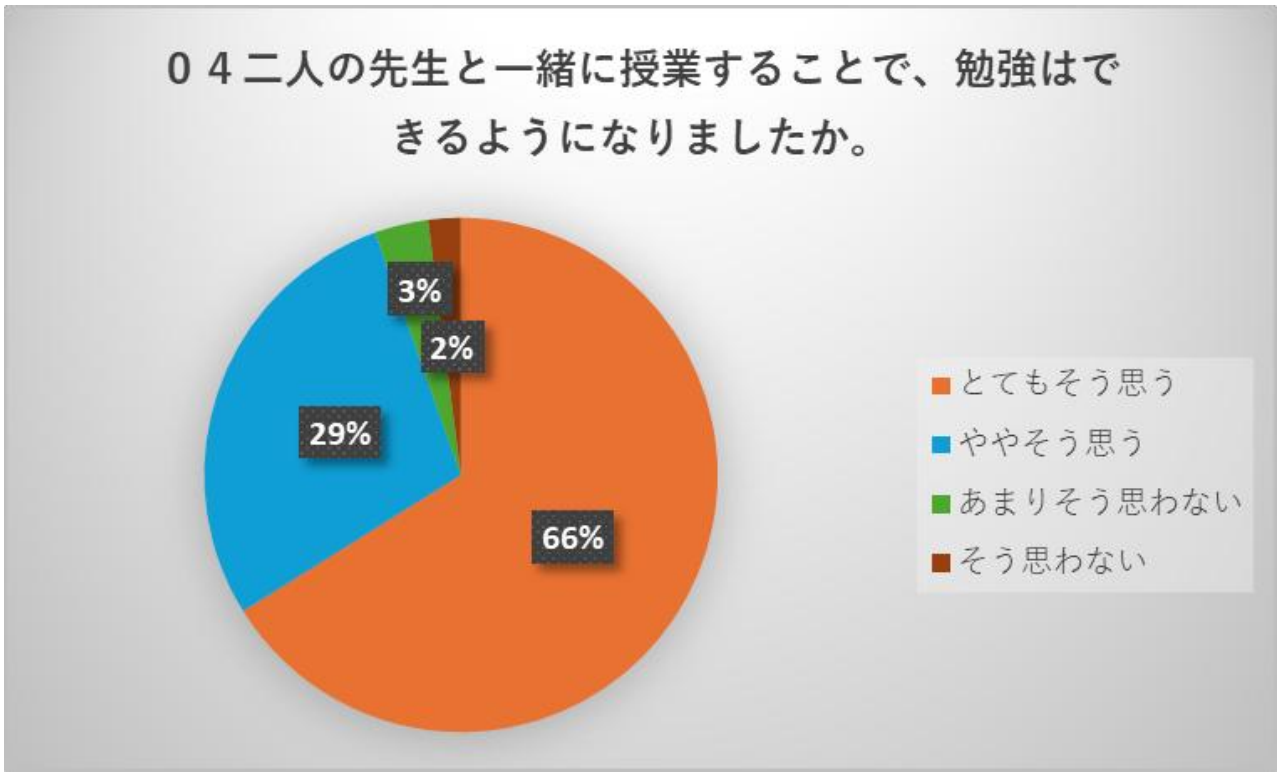
記述式

０４　二人の先生と一緒（いっしょ）に授業（じゅぎょう）することで、よかったことには、どんなことがありましたか。

記述式

７－２．本事業の児童による評価





０３　０２のように回答した理由を教えてください。

※主な回答をまとめて記載しております。文言は整えております。

【肯定的な回答】

・２人だとそれぞれのやり方があるからそう思った
・先生の教え方が上手い
・いつもわからないところがあったら教えてくれるから
・先生が細かく教えてくれたから
・人数が多くなって、どうこうすればいいよっていうのがわかりやすくなってテストの点数が高くなったことが増えたから
・先生たちが分かりやすく教えてくれたり計算が早くなるコツを教えてくれたから
・自分のペースに合った対応をしてくれるから
・前よりも勉強ができたと思った
・丁寧に説明してくれるから
・教え方などが違うけど、分からないときに他の子に教えていても、もう一人の先生に教えてもらえるから
・２人の先生がいて、わかりやすくて助かるけど、毎日手伝ってもらうわけではないから
・勉強ができるようになったから
・丸付けが楽になった
・色々なことを自分に教えてくれるから、いいと思う
・間違いを教えてくれるから
・人が少ないからたくさん見てもらえた
・２人先生がいるから、分からない問題も教えてくれるから
・算数の時に算数と絡めた余談などを教えてくれるから、より詳しくなった気がするから
・コースを別にしたから自分に合ったペースで行けるから
・その方が教えてくれる回数が増えるから
・すぐに直せたから
・丸付けを早くしてもらえたからすぐ直せた
・苦手だったところができるようになってきたから
・自分のレベルに合わせられたから
・ヒントを教えてくれたから
・１人の時より詳しく教えてくれるから
・褒められて伸びるタイプでほめてくれるから
・少しずつ教えてもらってだんだんわかるようになったから
・わかるんだけど、本当にちょっと厳しい
・分かりやすい言葉を使って説明をしていたから
・質問しやすいから
・教えるのはいいけど、難しいこともあるから
・意味がわかるときと、分からないときがあるから
・１人だと教える人が少ないけど２人では、色々教えられるから

・授業が楽しいから
・とても楽しく授業をできるから
・１人の先生がとても教え方がわかりやすくて、さらにもう一人の先生が教えてくれてはかどるから
・いっぱい学べたから
・先生たちがたまに面白いことをしたりしてくれるし、みんながわからないときにわかりやすく教えてくれるから
・二人の方が効率がよいから
・どっちの先生も、丁寧に教えてくれてたから
・苦手な勉強の時に二人の先生がいるからゆっくり教えてくれる先生がいて、勉強が得意な時はサクサク進むから自分に合った先生が選べるから
・算数がすきになった
・苦手な子でも勉強の速さが落ち着いてできるから
・３けた×２けたができるようになった
・授業が混乱しないから
・先生たちが優しく教えてくれるので、楽しくできるし、分かりやすいから
・２人の先生も面白かったし、わかっていることはあったが、先生とやると知らないような感じがして楽しかったから
・わからないことがあったら、机に来て教えてくれるから
・九九を教えてくれた時に、すごくわかりやすくて、ここはこうだよって言ってくれて、それがわかりやすかった
・勉強が最初はむずかしかったけど、二人の先生がいると支えてくれると簡単に勉強できたよ
・かけ算のひっ算が苦手だったけど、教えてもらったらできるようになったから
・自分のレベルに合ったコースで、勉強ができて、一人ひとり勉強しやすいと思うから
・昔はとても算数が苦手だったけど、２人の先生たちが教室に入ってから算数が得意になったし、算数がとても大大大好きになったから
・休んでしまってできなかったところをわかりやすく教えていただいた
・２人先生がいると仕事を分担できるから、先生が集中できて、授業がわかりやすくなった
・分かりやすくはなるけど、一緒ではなく、２チームに分けて授業をした方が個人差もあるからもっと良くなると思ったから

【否定的な回答】

・あまり分かりやすくないから
・教えてもらったことない
・教え方がちょっぴり難しくて、緊張をした
・そんなに理解してないと思うから
・難しい問題があって、わからなかったから
・特にかわらなかったから

０５　二人の先生と一緒に授業することで、よかったことには、どんなことがありましたか。

※主な回答をまとめて記載しております。文言は整えております。

・授業が分かりやすくなった
・わからないところもすぐに教えてくれたから
・分からない問題がわかるようになった
・分からないところを丁寧に説明してくれること
・２人からの教えがあると、もっとわかりやすかった
・間違っていても、易しく教えてくれるところ
・問題がすらすら解けるようになったこと
・楽しく授業ができる
・プリントで間違えた問題や分からない問題を教えてもらって算数が少し得意になった
・前までは一人しか先生がいなかったけど、今は二人の先生だから質問もしやすい
・それぞれのやり方のおかげで、いろいろなやり方を知ったこと
・勉強が楽しいから
・算数は苦手だったけど得意になった
・人が少ないから、黒板も見やすいし、教える人も半分だから１人にたくさん教えてあげることもできるため
・重要なことがわかることが多くなった。難しいことがわかるようになった。
・計算、かけ算、大きい数の足し算、大きい数の引き算、割り算などが計算しやすくなったり、友達に教えたりするときもある
・自分のレベルで勉強できる
・分からないとこも二人で教えてくれて効率よくできるから
・面白く、楽しく勉強を教えてくれること
・並ぶ時間が少なくなることで勉強をする時間が長く、とっても良い
・聞いてくれる
・いっぱい発表ができた
・友達と一緒に勉強できるから、楽しくて勉強が伸びた
・自分のペースで勉強を進められる
・説明する時など２人の先生がいることで、よりわかりやすくなるから、１人の先生が近くにいなくても聞けるから

７－３．児童の評価の考察

「０２　二人の先生と一緒に授業することで、勉強はわかりやすくなりましたか」の質問に対して、肯定的な回答が９５％という結果となった。授業を受けている児童の認識としても、本事業で実践している複数指導体制または少人数指導体制の授業がわかりやすいものとなっていることがわかる。

さらに、「０４　二人の先生と一緒に授業することで、勉強はできるようになりましたか」という質問に対する回答結果をみると、肯定的な回答が９５％と非常に高い結果となっていることがわかった。２人の先生による授業によって授業がわかりやすくなったと感じているだけでなく、児童の認識として勉強もできるようになったと感じていることは、本事業の目的である学力向上がしっかりと達成できてきているといえるのではないかと考える。

０２の回答の理由についての回答をみてみると、児童なりの言葉で２人体制だからこそわかりやすくなったという回答が多くあがっている。なかには具体例として事例をあげて勉強がわかりやすかった理由を回答している児童がいたり、苦手だった算数が好きになったという回答をしている児童がいたりと非常に多くの肯定的な回答があった。

０５のよかったことにどんなことがあったかという質問に対しても、授業が分かりやすくなった旨の回答が非常に多くあがっていた。

日頃から授業の際に、学級担任とスマート教員が連携し、児童にとってわかりやすい授業展開を工夫しているからこそ、児童から上述したような回答があがってきたことと考える。また、児童の回答の中には、スマート教員の先生の個人名を入れたうえで、「〇〇先生が教えてくれたおかげで、…」のような回答も複数みられた。そのような回答からは、スマート教員と児童の関係づくりがしっかりとなされており、落ち着いた学習環境づくりや基礎学力の向上に向けた日々の実践が非常に効果的なものとなっていることがわかる。「勉強がわかりやすくなった」や「勉強ができるようになった」と児童が感じていることも本事業の成果といえるのではないかと考える。

ただ、回答のすべてが肯定的なものではなく、「あまりわかりやすくなかった」や「あまり変わらない」などの回答も少なからず見られた。０２と０４の質問に対する回答結果をみると、それぞれ５％ずつではあるものの、否定的な回答も見られたことは本事業の課題として受け止めて、次年度以降の取組に生かしていく必要があると認識している。

そのため、否定的な回答があった児童を学年でみてみると、０２の質問に対して否定的な回答は９５件あり、そのうち５２件が第３・４学年の児童であった。残る４３件の内訳は第１学年が２０件、第２学年が２３件となった。その結果から、概ねどの学年においても同じくらいの人数が否定的な回答をしているものと認識したものの、第１学年の否定的な回答児童の理由をみると、「アドバイスをくれるから」「理由はわからない」「難しいこともできたやりやすい」などの回答がみられ、回答と回答理由に乖離がみられるものがあった。一概にはいえないものの、誤って選択して回答した児童も一定数いるのではないかと考えられる。この傾向は第２学年にもみられ、否定的な回答をした児童の理由の中にも、「たくさん問題ができたから」「２人先生」などの回答がみられ、乖離がみられた。

とはいえ、まだまだ「わかりやすい授業」であったり、「勉強ができるようになったと感じる実践」には少なからず課題がみられることから、すべての児童の基礎学力の向上に向けて、本事業の取組を見直し、よりよいものに改善していきたい。

８．まとめ

８－１．得られた成果

①アンケート調査による教員・スマート教員・児童の評価

肯定的な回答状況は、教員向けアンケートの「０２　本事業は、子供たちの学力向上や学習意欲の向上に繋がっていると思いますか。」という質問に対しては９８％で、「０３　本事業により、肯定的な効果が感じられたものには、どのようなものがありましたか。」という質問に対して、「学力向上」「落ち着いた学習環境づくり」の回答が半数以上で、スマート教員向けアンケートの「０２　本事業は、子供たちの学力向上や学習意欲の向上に繋がっていると思いますか。」という質問に対しては９６％で、「０３　本事業により、肯定的な効果が感じられたものには、どのようなものがありましたか。」という質問に対して、「学力向上」「落ち着いた学習環境づくり」の回答が半数以上で、児童向けアンケートの「０２　二人の先生と一緒に授業することで、勉強はわかりやすくなりましたか。」という質問に対しては９５％で、「０４　二人の先生と一緒に授業することで、勉強はできるようになりましたか。」という質問に対しては９５％であった。

したがって、本事業の目的は概ね達成することができてきている状況であることがわかった。また、主目的ではないものの、本事業の取組によって、「児童理解」や「教職員の業務負担の軽減」など副次的な好影響も現れていることがわかった。

②スマート教員の効果的な活用

スマート教員活用プランの記載内容から、各校において様々な授業形態での実践がなされていることが分かった。複数指導体制（いわゆるＴＴ）の授業では、学級担任がＴ１、スマート教員がＴ２の役割分担での授業形態が多くみられた。他にも、単元や学習内容、学習展開に応じて役割を入れ替え、スマート教員がＴ１を担う授業形態を取り入れている学校もみられた。また、事前に学級担任とスマート教員が打ち合わせを行い、授業内での机間指導の仕方や評価の見取り方を分担して行うことで、なるべく多くの児童に関われるような学習環境を整える実践も行われた。このように、学級担任とスマート教員が連携し、複数指導体制を実践することで、複数の目で児童一人ひとりを見取ることができ、個々の学習の定着状況の把握や深い児童理解を行うことができた。

少人数指導体制の授業では、１つの学級を均等二分割で２グループに分けて実践する授業形態を取り入れている学校も複数あった。また、２つの学級を習熟度別で３グループに分けて実践する授業形態を取り入れている学校もみられた。

各校では授業形態を工夫するだけでなく、実態に応じてスタディサポート事業にも取り組んでおり、児童の既習事項定着に繋げていた。

各校の取組の評価については、スマート教員活用プランに成果と課題としてまとめている。学校によっては、学力の低い児童を抽出し、抽出した児童を年間で追いかけ、志木市学力・学習状況調査の結果から学力の定着度を見取っていた。当該校では、抽出児童の半数以上がゴール像として設定していた学力段階に到達しており、当該校の取組が児童の学力向上に関して成果をあげたことがわかった。同様に、各校のスマート教員活用プランの成果の記載内容をみると、一定の学力向上の成果をあげていることがわかった。

③スマート教員の授業力向上

令和６年度から実施しているスマート教員授業研究会を通して、複数指導体制あるいは少人数指導体制での授業について、スマート教員で研究協議を行い、授業力の向上に繋げることができた。協議の中では、各校での実践についても情報共有できる場面を設けることで、スマート教員の見識を広げる機会となったと同時に、スマート教員同士の横の関係性を構築する機会ともなった。協議の後には指導・講評を行うことで、授業のよかった点や改善するとよい点、どのように改善するとよいかといった改善案などについて学ぶ機会になった。スマート教員の中には、教員の経験がない者もおり、翌日からすぐに取り入れられる技術などを学ぶこともできたスマート教員授業研究会は、直接的に授業力向上に繋がった。

④学力・学習状況調査結果の評価

平成３０年度から実施した第１学年から第３学年までを対象とした志木市学力・学習状況調査によって、毎年度国語と算数の学習内容の定着状況を調査してきた。２観点平均正答率を確認すると、毎年度全国の平均正答率と同水準を推移していることがわかる。平成３０年度は第１・２学年において全国の平均正答率を上回っており、第３学年に関しては国語と算数のどちらも全国の平均正答率を下回っていた。第１学年の全国比は、国語１０１、算数１０１であり、第２学年の全国比は、国語１０２算数１０２であった。第３学年の全国比をみると、国語９５、算数９５であり、全国の平均正答率とは大きく差が見られる結果であった。令和７年度の結果をみると、第１学年の国語９８、算数１０１、第２学年の国語１００、算数９９、第３学年の国語９９、算数１００であった。平成３０年度と比べると、令和７年度はどの学年・教科も全国の平均正答率と同水準となっており、第１学年から第３学年まで基礎学力の定着及び向上が図られてきていることが分かった。

８－２．今後に向けて　～検証委員会終了後も継続して取り組むこと～

①スマート教員の授業力の向上

複数・少人数指導体制の成否は、組織体制づくりはもとより授業を進める教職員やスマート教員一人ひとりの資質が大きく影響する。スマート教員については、実際の授業や教科指導経験の少ない者もおり、学校と市教育委員会において意図的・計画的に育成を進めてきたところである。令和７年度からは、年度当初にスマート教員研修会を実施し、スマート教員の配置目的や業務の内容について理解を深めるとともに、年度途中には授業研究会を２回開催し、基本的な算数授業の流れはもとより、よりよい複数・少人数指導のあり方について協議を進めたところである。

今後も、スマート教員の教科指導力向上に資する研修会を企画運営するとともに、児童理解研修など様々な視点を加え、スマート教員の資質向上につながるよう改善を図っていく。そのうえで、一層、児童にとってよりよい授業・指導ができるスマート教員を育成していく。

②よりよい連携・連絡調整

スマート教員の効果的な活用にあたっては、複数指導、少人数指導のどちらにおいても、学年や学級担任との連携・連絡調整が重要であり、限られた勤務時間の中、よりよい連携ができるよう、検証委員会や幹事会、研修会においても活発な意見交換や好事例の共有が進められた。各校の連絡調整方法に関しては、連絡ノートやGoogle Classroomの活用等が報告され、各校においても実践が進んでいる。現在、全国的に教職員の働き方改革が進んでいるが、学級担任の業務は多岐にわたり、必然的に打ち合わせ時間も限られてしまうことから、令和８年度以降は、スマート教員にもタブレット端末を一人一台配付するとともに、新たに導入する新校務支援システムを活用するなど、教育ＤＸを生かしたさらなる連携・連絡調整方法を模索していく。

③成果・効果の多角的な検証

複数・少人数指導及びスマート教員の配置は、小学校低学年期においてきめ細かな指導を進め、学力向上や学習意欲の向上につなげることを目的としている。検証委員会では、様々な視点から各校の取組を分析検証するとともに、よりよい複数・少人数指導のあり方について検証してきた。

今後は、いわゆる認知能力を中心とした効果検証にとどまらず、非認知能力や不登校児童生徒数・いじめの認知件数についても検証項目に加えることを検討していく。

さらに、本市が進めている小中一貫教育において、１年生から４年生までの複数・少人数指導体制が、本市のめざす９年間をひとつながりとした小中一貫教育において、どのような役割を担っていくべきかについても検証していきたい。特に、数値をもとに検証することが困難な項目等についても、教職員や児童生徒へのアンケートや保護者に依頼する学校評価等を活用し積極的に検証を進めていく。

本市の学校システムに定着したといえるスマート・クラスについては、常に改善・改革に取り組みながら継続し、９年間を通じた一貫したカリキュラムに基づき、切れ目なく児童生徒の育成を推進していく。

９．令和７年度志木市複数・少人数指導体制推進事業検証委員会　構成員

検証委員会

令和７年度志木市複数・少人数指導体制推進事業検証委員会　**委員**

氏　　名	役　職　等
関口　睦	埼玉大学教育学部教授、 埼玉大学附属中学校長
中田　裕規	学校運営協議会委員
八代　豊	前志木市教育委員会 教育長職務代理者
岡　和香子	志木市立志木第三小学校長
田中　孝幸	志木市立宗岡第三小学校長

令和７年度志木市複数・少人数指導体制推進事業検証委員会　**事務局**

氏　　名	役　職　等
柚木　博	志木市教育委員会教育長
今野　美香	志木市教育委員会教育政策部長
佐野　隆之	志木市教育委員会教育政策部 理事兼学校教育課長
尾﨑　秀一	志木市教育委員会学校教育課 主幹兼指導主事

※役職等に関しては、令和８年３月時点